

はじめに

平成十六年五月、当会のパンフレットで狂言《通円》について書く機会を与えられた。短いものだったので、宇治橋のたもとの通円茶屋に置いてあった持ちかえり自由のチラシなどを利用して簡単に書いて、ことなきで済ませた。しかし、どうも気になって、その後通円茶屋の通円亮太郎氏のご厚意もあり同家文書を紹介しつつ『説話論集』第十五集に「狂言《通円》をめぐって」(平成十八年一月・清文堂出版社)を41頁にわたって発展させることができた。当日パンフレットをご覧になったただけの方には申し訳ないのだが、今回も雑感を述べるにとどまり、今後の展開を長い目で見守っていただきたいのである。

一、梗概

小林責・西哲生・羽田昶各氏の四十年にわたる成果として『能楽大事典』(平成二十四年一月・筑摩書房)が出版された。出版社側では今日の経費削減の折、さして宣伝もされないようなので、この紙面を借りて、敬意を表してあらずじをそのまま引用したい。

「兄・頼朝との不和により、源義経(字方)は武蔵坊弁慶(ワキ)・従者たち(ワキツレ)を伴い、都を出て西国へ向かう。一行は津(摂津)の国・尼崎の大物の浦へ着き、弁慶は所の船頭(アイ)に宿を申しつける。弁慶は、同行の静御前(前シテ)を都へ返すことを義経へ進言、さらにその旨を静御前に伝える。一同は別れの酒宴を催し、静は烏帽子をつけて、一行の門出を祝う舞(中ノ舞ないし序ノ舞)を舞い、やがて静一人を残し一行は船出をする。静かな海上が急に嵐に変わり、平家一門の怨霊たちが海に浮かぶ中で、平知盛の亡霊(後シテ)が長刀をかざして義経に迫るが、弁慶がこれを祈り伏せ、亡霊は消え失せる」。同事典は狂言に比して能のあらずじは簡略なのだが、そのことについて『能楽大事典』の出版「(能楽タイムズ)平成二十四年一月号」で小林責氏が松本雍氏に答える形で「狂言は筋を説明しなければならぬけれども、能は筋よりもテーマが重要なので、ストーリーはこまごまと書かなくていいから」と述べておられる。実に一見識が見られる。

二、作者と構想

作者は観世小次郎信光。宝徳二年(一四五〇)生まれか。

没年は『実隆公記』等に從つて永正十四年(一五一七)とした方がよからう。世阿弥の養子だった音阿弥の七男。叔父観世弥三郎に大鼓を習い、十五歳で権守となるなど早くから頭角を現した。太鼓も金春弥次郎善徳の弟子であった。作能は三十番にも及び、《道成寺》の原型である《鐘巻》もある。そのすべてが太鼓入である。シヨリ的な催しは戦国乱世の観客に受けたといった特色は、実は金春禪鳳(享徳三年(一四五四)―?)の作風にもつながる。二人はほとんど同世代である。《船弁慶》を信光作とする証拠は『能本作者註文』など複数の書き上げによつているので、まず間違いはないと思うのだが、一方で金春系伝書の中には禪鳳作とするものもあるのですが、一方では信光と禪鳳は同時代で張り合つていたよきライバルであつたと捉えた方がよいようである。

次に《船弁慶》の構想上の契機は『平家物語』というより『義経記』である。金剛流一番綴謡本の「出典」で「義経記巻四『義経都落の事』」を取り上げ、「同じことは吾妻鏡や、平家物語にもあるが、義経記のそれが最も詳しい」とするのは正しい。碇を背負つて入水するのは実は『平家物語』では教盛・経盛なのだが、既に《大原御幸》に「新中納言知盛は沖なる船の碇を引き上げ、兜とやらんに戴」いて「海に入りにけり」の表現がなされている。同曲は禪竹の『五音十体』の草稿本に記載されていることが近年判明した。となると益々金春系の伝承の過程から生まれた曲と考えたくなる。同主題の《碇潜》は、歌舞伎《義経千本桜》につながっていく後発の曲と私は今のところ考えている。その有名な場面は

壇ノ浦に面する「みもすそ公園」に建てられている。なお、伊海孝充氏は《船弁慶》を長刀芸を見せ場として作能されたものとしてとらえられている。「長刀を持つ知盛の成立」でインターネットから取り出せる。

三、『謡抄』の解釈

謡の初めての注釈書『謡抄』(文禄四年(一五九五))の解釈は信光の時代に近いこともあり、当時の知識人たちがどう解釈していたかを見る上で有効ではないだろうか。

「落居〓此時の都落ちは五百余騎也。十余人にあらず」とする。「たゞ十余人すごと」とのころである。『平家物語』では「わずか五百騎」、『義経記』でも「その勢一万五千余騎」だが「西国に聞えたる月丸といふ大船に、五百人の勢を取乘せて」とあり、同数である。

「人口〓此時に静をかへされし事はなき事也。静ばかりにあらず、女房たち十四人舟にのせて出られしに、難風吹き出で、舟を住吉の浦へ波が打あげし時、女どもをば皆住吉の松にすてをき、義経は吉野へ落られし也。其時、静も住吉にすてられし其内也」とする。『平家物語』では「都よりあひ具したりける女房達十余人、住吉の浦に捨てをきたり」とある。「十余人」を「十四人」としたものであろう。なお、『義経記』では十一人で、静を吉野まで連れていつているのは《吉野静》でも御承知の通りである。信光は青年期に応仁・文明の大乱(一四六七―七七)を体験し、世はまさに父子兄弟が

争う戦国時代へと向かおうとしている。静御前の舞、功成り名遂げる武士道が好まれ、兄頼朝もいずればわかつてくれるだろうとはかかない思いは当時の観客にも同感できたのであろう。

「いそぎ御舟を出すべし」大物浦より舟の出日は、十一月四日也」とする。『平家物語』『義経記』共に都を出たのは三日とする。今の大物主神社の前あたりであろうが海岸線よりはかなり隔たっているので、一度行つたきりで幻滅した。

「平知盛」桓武天皇十三世の孫也。九代の後胤にあらず。

四、弁慶

気になっていたことがあった。学部時代、岡見正雄先生の授業を受けていた。先生はその起ち居姿そのものが「中世」であった。冗舌ではないし、ともすると変人ぶりが語り草になつているが、そこにいらつしやるだけで「中世」を感じたものである。「室町ごろ」は名論文である。教科書は自ら著された岩波古典大系『義経記』であった。そして、ここにこされながら弁慶はいなかった、と私には聞こえたのである。今、その解説を読みなおして「少なくとも弁慶法師は吾妻鏡には一箇所確実にその名が見え、今日伝わっている平家物語にも、有力な義経の家来としてその名が見えるには見えても、義経の一の家来としての姿を明瞭にさせているのは伊勢三郎義盛なのである」を敷衍しておっしゃられたことなのであろう。今では鎌倉幕府の公式記録と思われていた

『吾妻鏡』ですら文学的誇張がなされているとの説もある。弁慶って本当にいたのかしらと思えてくる。

翻つて能《船弁慶》であるが、シテは前が静御前であり、後が平知盛である。前場の美人が一転して後は猛々しい武士になる二役が難しいし、やりがいがあるのであろう。あくまで弁慶はワキである。しかし、最後まで活躍するワキである。シテと同等といつてもよい。このようにワキを活躍させるのも信光の特徴であり、『皇帝』『張良』『遊行柳』はワキの名がそのまま曲名になつている。

岡見先生は『義経記』は北海道の漁師さんに愛読されたのだとおっしゃっていて、これには当時感激したものである。義経は平泉で討ち死にしたのではなく、生き延びて北海道に渡り、さらには大陸でジンギス汗になつたという伝説を踏まえたものである。『義経記』を本格的に研究するなら北海道の漁師さんの家を一軒一軒訪ねなければならぬなどの当時の私は興奮気味で伺つていた。のちにNHKで義経ジンギス汗伝説は日本が大陸侵攻をねらつたルートと同じであるとの放映があり、がっかりしたこともある。

五、見るべきほどのことは見つ

平知盛が平家の代表格として出てくるのも不審であった。『平家物語』ではほとんど活躍していないし、『義経記』でも退治されるのは「我ら悪霊死霊」で知盛の名前は出てこないからである。今年、大河ドラマ「清盛」でおびただしいほど

の『平家物語』関係の本が店頭に並ぶ。中世文学研究を標榜している者としては痛い出費が重なる。その中で研究書とはいえないが『源平1000人』（世界文化社）の記述には納得がいく。清盛が見こんだ軍事司令官の素質があるのが知盛であったが残念ながら病弱であったと解説する。それにしても『平家物語』知盛入水の場面で「見るべきほどのことは見つ」の名セリフを信光に気づいてもらいたかった。なお、藤岡道子氏編『岡家本江戸初期能型付』に「後シテ、面、鷹の面。東江にても。是は金剛家の面也。天より降りたると云伝る」とあるのが興味深い。

六、小書「白波之伝」「名所教え」

『船弁慶』には小書いわゆる特殊演出が多い。『能楽大事典』でも「その種類の多いことは現行曲中、随一といえる」とある。その中で、今回の小書「白波之伝」については、筆者はうといので金剛流一番綴謡本の解説をそのまま引用する。「金剛流独特の業物として有名である。前シテの舞は盤渉序之舞となり、後シテの装束は白地狩衣となる。「波に浮かみて見えたるぞや」で橋掛り三の松に出て名のり、「声をしるべに出船の」で幕に入り、早笛で改めて走り出る。型は常よりも激しく、キリでは舞台から橋掛りへ流れ足をつかい、そのまま幕へ舞い込む。「跡白波とぞなりにける」の地謡が静かに反復される」とあり、波間之伝に「白波之伝の原型と言われ、橋掛り三の松へ出るところを、幕を上げた中で床几にかかつて

名のる」ともある。

「名所教え」の小書替間もある。アイの船頭が船から見える生田の森・麻耶山・一の谷・須磨浦・武庫山・讓葉が嶽の名所を指し示す。まさに次の急展開が起こる前の静なる語りである。船頭に船歌を謡わせるのが和泉流と鷺流である。和泉流では重習となっている。狂言方を活躍させるのも信光の特色である。

余談

名古屋で中世文学会があつた時、まだ院生であつたが、井野川幸次氏の平曲を聴くことができた。最高位検校の正装。盲目で、おつきの方に導かれて登場される姿そのものにも神々しさがあつた。まだ平曲は残っていたのだという感激にも浸れた。『日本歴史と芸能』（平凡社）にわずかに残されている本物の映像を極力学生たちに見せている。

山下宏明先生がはまってしまったとおっしゃられるDVD『原典平家物語』（ハゴロモ）を関大で購入してもらえた。大がかりな装置を使う訳でもなく、純粹に『平家物語』の原文を役者の力量もあるうが、実に聞かせてホールを満員にする。授業での学生諸君の評判もいい。改めて古典の持つ力強さに気づかせてもらえたい企画である。